S. Ashina

＜前回＞基督教の成立と初期キリスト教

Ａ．イエスの宗教運動

（１）神の国

１．新約聖書学→仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）

２．イエスの福音

３．「神の国」の宣教：国（バシレイア）：神の制定した新しい秩序（支配）

cf:国家機構・王国

４．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）

階層性・二分法・対立　　的はずれ　　cf:規則の侵害

５．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音

↓　　「山上の説教」（マタイ５～７）

イエスの運動：教え・論争・癒し（奇跡・しるし）、共同生活（共食＝開かれた食卓）

（２）終末論と知恵

６．終末論の類型

・ユダヤ的な終末論→キリスト教へ：イエス＝ダビデの子孫、人の子のようなメシア

イエスの宗教運動では、ユダヤ的な終末論の意味転換がなされている。

「義人の王国」から「罪が招かれる神の食卓」

「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」（マタイ 5.3）

「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」（マタイ 9.12）

７．知恵の教師イエス

８．慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）

９．知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

Ｂ．初期キリスト教とパウロの世界伝道

（１）問題設定・背景――初期キリスト教あるいは原始キリスト教

１．イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで

２．新約聖書の記述の歴史性

（２）諸問題

５．難問

・イエスの宗教運動と初期キリスト教の関係。復活と聖霊降臨の出来事は何であったのか。

・パウロ書簡の正典編入の意味

６．イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性

単線的な歴史像は後の再構成である。

・エルサレムとガリラヤ

・ヘブライオイとヘレニスタイ

・マック「この初期の時代から、イエスの追従者たちの五つの異なるグループ」

７．パウロ書簡の正典化の意味

・異邦人伝道から世界宗教へ

・世俗的共同体への配慮あるいは共存

ヘレニズム・ユダヤ教を背景とした、ローマ市民パウロの存在意義。

↓

ローマ帝国の全体に及ぶ大規模迫害以前の歴史的状況において、ユダヤ教から自らを差異化しはじめたキリスト教会の行った選択？　（あるいは、この選択を行ったグループのみが存続可能であったのか？　しかも、かなり微妙なタイミングであった、70 年のエルサレム神殿崩壊から 95 年頃のドミティアヌス帝のキリスト教迫害の間）

８．ユダヤ教と初期キリスト教
ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。
ヨハネ文書（教団）の歴史的背景。
10. キリスト教はいつキリスト教になったのか？　キリスト教とは何か？
イエス／パウロ／パウロ以後

（３）パウロ――迫害者から使徒へ

30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）
11. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
12. 新しいパウロ解釈（パウロ･ルネサンス）：1980 年代以降
13. パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市
様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。
14. 迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）
↓
地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道、キリスト教急速な拡大（点から点へ）

Ｃ．パウロ以降のキリスト教とユダヤ教

（１）ユダヤ教とそのキリスト教に対する関係性

１．古代イスラエル宗教からユダヤ教への歴史的展開
バビロン捕囚以後：唯一神教への純化（宗教改革）、正典編集とその文書化
ディアスポラ（神殿からシナゴーグへ）
２．唯一神教への純化と新たな思想展開：知恵文学と黙示文学
３．ヘブライ語聖書のギリシャ語訳（LXX）→キリスト教の聖書
BC.３世紀のアレクサンドリアのユダヤ人共同体、70 人の長老の派遣。
パウロが読み引用した聖書は何か？

（２）ユダヤ教の知恵文学の展開とキリスト教

５．創造思想の展開と知恵の人格化
６．知者の系譜と教父思想　→ キリスト教の基本教理の形成

（３）フィロン

８．キリスト教への多層的・多面的な影響
聖書とギリシャ哲学との関連づけというキリスト教教父の課題の先駆者
９．フィロンのロゴス論
10.『世界の創造』の「二段階創造論」
第一創造物語→可知的人間（人間のイデア）／第二創造物語→可感的人間（土の塵）
神の像
↓
キリスト教におけるプラトニズムの受容、聖書のアレゴリカルな解釈の影響。
アウグスティヌスによる創世記注解

（４）キリスト教にとってユダヤ教とは何か

11. ヘレニズム世界という環境の中におけるキリスト教の母体
ヘレニズム世界への土着化に関しても、そのモデルになる
12. キリスト教がいつからキリスト教に、いかなる意味でキリスト教になったかを理解する上で不可欠の参照点。キリスト教の聖書的伝統からの逸脱に対する批判のための外部視点を提供する。キリスト教の逸脱形態には、旧約聖書否定論がしばしば伴う。
13. きわめて近い存在であり、同時に不幸な歴史。
キリスト教がパウロ主義を採用したことの意味。

２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家

（１）教父とは誰か

Ａ．小高毅『古代キリスト教思想家の世界――教父学序説』創文社、1984年。

「ダマスコのヨアンネス（七九九年没）まで続き、彼をもって東方教会最後の教父とされるのである。では、西方教会に目を転じてみよう。ヒッポの司教アウグスティヌスは、四一二年以降、ペラギウスの異端に対処し、数々の著作をなしている。」(14)

「「教父」の概念の基準」
「①教理の面で正統信仰を保持していること（doctrinae orthodoxia）
②聖なる生涯(sanctitas vitae)
③教会の承認（approbatio ecclesiae）
④古代教会に属すること(antiquitas)」(20)
「教会の公文書、宣言のうちに信仰の証人として引証されること」(21)
「「教父学」という名称が確立するのは、一六五三年、ルター派の神学者Ｊ・ゲルハルト(Gerhard)の『教父学』(Patrologia)の刊行によるとされている。」(22)

Ｂ．ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ』（著作集・別巻二）白水社、1980年。

「使徒教父とは、新約聖書に直続する最も早い著作者たちであって、彼らのうちの何人かはそれどころか新約聖書の最も新しい文書の著者たちよりも以前に活動したのである。」(53-54)

アンテオケのイグナティウス、『ヘルマスの牧者』の著者ローマのヘルマス、ローマのクレメンス

「弁証家」「組織的な基督教神学の創始者」「特定に告発に対する返答という形式において、自己主張した」(65)

反グノーシス的教父、アレクサンドリア学派（クレメンス、オリゲネス）

＜文献＞

1. Johannes Quasten, *Pathology*, vol.1-4, Christian Classics, 1983-86(1950/1978).
2. Heinrich Kraft, *Einführung in die Pathologie*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1991.

（２）使徒から使徒教父へ

１．「使徒時代に直ちに続く時代を「使徒直後時代」と呼んでいるが、その時代におけるキリスト教思想の本流と思われるべきものは「使徒教父」の思想である」、「ただし「使徒教父」という呼称は十七世紀に初めて用いられたもので、使徒たちと直接の交渉を持った教父たちの意味である」、「内容的には、一世紀末から二世紀前半における異邦キリスト教の所産としての一群の文書を指している。新約聖書中の諸書と使徒教父の諸書との間には時代的に相重なる部分もあるが、概して言うなら使徒教父は新約につづく時代に属している」（有賀、98）

Patres Apostolici

２．「十二使徒の教訓（ディダケー)」、「バルナバの手紙」、「クレメンスの手紙（第一)」、「クレメンスの手紙（第二)」、「イグナティオスの手紙」、「ポリュカルポスの手紙」、「ポリュカルポスの殉教」、「パピアスの断片」、「ディオグネートスへの手紙」、「ヘルマスの牧者」(『使徒教父文書』所収)

３．使徒教父の歴史的背景：ユダヤ教との関係、ローマ帝国との関係
第一次（66-70）と第二次(132-135)のユダヤ戦争

課題：殉教精神、異端との対決、初期カトリシズムへ（信仰告白の成立、教職制の確立）

４．先行・隣接の宗教（とくにユダヤ教）から、イエスの出来事を解釈するのに必要となる象徴概念を受容・改変

メシア、人の子、ダビデの子、神の子、キュリオス、ロゴス

↓

テオロギア・クリスティ：「神についてと同じようにキリストについて」

イエスにおける神性の経験

↓

唯一神論との関係づけの課題（三位一体論、キリスト論）

後に体系的な解決を必要とすることになる。

５．主要な教説

・「無からの創造」、全能の神

「ヘルマスの牧者」の「第一にまぼろし」:「天に座し、無から有を創り、それを聖なる教会のために、ふえ広がらせたもうた神があなたのことを怒っておられます。」

・「神の救済の経綸（オイコノミア）」、キリストの先在、霊キリスト論

・聖餐論（アンティオキアのイグナティオス, Ignatios, 35 頃-110 以降）

６．殉教者イグナティオス（佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社）

・「イグナティオスは殉教が直ちに「神に至る」道であると考えており、それはまた当時のキリスト者たちの通念でもあった。普通の死と異なって、殉教死はキリストの受難に文字どおり与ることである。したがって殉教者は死後の中間状態を経ることなく、直ちに神のみまえに出ることができるというのが、かれらの信仰であった。」（有賀、108）

・「彼が排斥している異端には二種類」、「ユダヤ主義を非難」、「仮象説」「仮現説」への批判。「イエス・キリストが真実に誕生し、真実に受難し、真実に死に、真実に復活したということである」（109-111）

・「アンティオキア教会」への責任、「単独司教制」「「エピスコポス」は「神の代わりに」教会における主座を占める」、「普遍的教会としての＜ヘー・カトリケー・エクレーシア＞は、イエス・キリストのいますところなら、どこにでも現在する。その普遍的教会の具体的顕現が地域的教会である」（112）、「「感謝の祭」（エウカリスティア）としての聖餐」（112）

７．終末の遅延→制度的倫理的な規定の整備（新律法主義）　cf. パウロ書簡と牧会書簡

「ディダケー」：生命の道と死の道とにかかわる倫理的教訓、教会的諸行事に関する規則（バプテスマ、断食、祈祷、聖餐）、使徒・預言者について、同信旅行者への待遇について、日曜礼拝について、職制（エピスコポイ、ディアコノイ）について、終末論的警告。

（３）使徒教父の役割

迫害下の状況における正統教会への道。

８．初期キリスト教から初期カトリシズムへの歴史的展開（制度化・正統教会形成）のプロセスにおいて、キリスト教を担ったキリスト教指導者。正統キリスト教から逆に歴史を遡及するときに、確認できる教会指導者たち。

ヘレニズムのユダヤ教やグノーシスなどが競合する思想状況で、後の正統キリスト教へと展開する方向性を示している。

（４）キリスト教弁証の意義

９．「二世紀の弁証論者のもとにひとは、ユダヤ教的―異教的環境世界による、もしくはローマの国家権力によるキリスト教へのとく知られた中傷と迫害に対して、はじめて文書による抵抗を示したキリスト教思想家のことを理解している。」（ヴァイシュラーク上、157）
「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってローマにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」（ティリッヒ、65）
「キリスト教の弁証への試みは宣教の始めからすでになされていたと言っていい。パウロの思想もヨハネの神学も福音の弁証から生まれたものである」「イエス・キリストとその十字架」「を福音として人に伝えるためには説得力のある説明がなされねばならない。それが弁証である。」（有賀、133）

→　古代の弁証家と弁証一般

10.「クァドラトス、アリスティデス、殉教者ユスティノス、タティアノス、アテナゴラス、アンティオキアのテオフィロス」（クラフト、350）
11. タティアノス（Tatianus）：ユスティヌスの弟子。「ディアテッサロン」（Diatessaron）のいう「調和福音書」の著者。シリア教会で５世紀まで使用。
12.「弁証学者たちの「哲学」は、覚知主義者たちの説いたグノーシスと異なって、キリスト教の基本信条である創造神の信仰、神の子の受肉としてのイエス・キリスト、その十字架、死、復活、再臨、および最後の審判、肉体の復活と救われたる者に与えられる永遠の生命などを否定したのではなく、ただ能うかぎり哲学的にそれらの合理性を弁明しようとしたものであった。」（有賀、137）

＜文献＞
筒井賢治『グノーシス――古代キリスト教の〈異端思想〉』講談社選書メチエ、2004年。
大貫隆『グノーシス「妬み」の政治学』岩波書店、2008年。
Ｃ．マルクシース『グノーシス』教文館、2009年。

（５）ユスティノス（Justinus Martyr, --165）

13.「プラトニズムとストア哲学を全面的に棄てたのではなかった。キリスト教の信仰に一致し、またそれの弁証に役立つと見られた教理は、かれも用いているのであり、したがってアリスティデスの場合と同様、かれの神論も多分に哲学的一元論の性格を帯びている」、「かれの神は人格神であるに違いないが、しかしそれは擬人的神観ではない。旧約聖書には擬人的表現が用いられているが、かれによれば、それは比喩的に解さるべきものである。」（135）
14. ロゴス・キリスト論
「神は超越的な「名称すべからざる」究極者」、「究極者から」「ロゴスが生まれた」、「この「生まれたるもの」として第二神ロゴスが万有創造に際して父なる神のために動作者となり、またアブラハム、ヤコブ、モーセ等に現われて神の意志を伝達したのである」、「そのロゴスが人になって現われた者がイエス・キリストである。そのロゴスの働きはイスラエルの範囲に限られていない」、「人間にはすべて「ロゴスの種」または「種子的ロゴス」が宿っている」、「キリストはロゴスそのものとして、哲学者たちに優っているが、両者は全く別の真理を示しているのではなく、ただ真理啓示の完全・不完全の差異があるのみである。」（136）

↓

15. キリスト教のギリシャ化（ハルナック）？　あるいはギリシャのキリスト教化？
学問的神学としてのキリスト教思想、しかし、キリスト教的視点から選択が行われた。

これ自体がキリスト教形成の一つのあり方ではなかったか。

弁証家の方法としての「相関の方法」（ティリッヒ）

16. 宗教多元性におけるキリスト教（古くて新しい問題）、包括主義？

「キリスト者が自らの宗教を他の誤った諸宗教と並んで存在する――たとい真正の宗教であっても――一つの宗教であるとは見なさなかった」、「彼はキリスト教を完全なロゴスの出現のなかに基礎づけた。つまりキリスト教は、すべての宗教の否定克服であり、まさにそのようなものなるがゆえにすべての宗教をそのなかに包括しうるところの普遍的真理の時間空間における出現に基礎づけられるのである」（ティリッヒ、70-71）

「彼のなかにあらわれた基本的真理がその本質において普遍的なものであり、したがってその他のあらゆる真理をそのなかに含意するものであることを意味する」（71）

17. アレクサンドリアのフィロンに遡る思想系譜（ヘレニズム・ユダヤ教）

＜参考文献＞

１.『使徒教父文書』《聖書の世界》新約II別巻４、講談社。

２.『中世思想原典集成』平凡社。

３.『キリスト教教父著作集』全22巻、教文館。

４.『キリスト教古典叢書』創文社。

５. H. クラフト『キリスト教教父事典』教文館。

６. 小高毅『古代キリスト教思想家の世界　教父学序説』創文社。

７. 有賀鐵太郎「使徒教父」「教父哲学」『信仰・歴史・実践』著作集６、創文社。

８. 水垣渉『宗教的探求の問題』創文社。「第二部　ユスティノスと探求の問題」

９. 柴田有『教父ユスティノス　キリスト教哲学の源流』勁草書房。

10. ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ　古代から宗教改革まで』著作集別巻二、白水社。

11. H・チャドウィク『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。

12. K. バイシュラーク『キリスト教教義史概説』上下、教文館。

13. 芦名定道『自然神学再考』晃洋書房。

「第一章　古代キリスト教神学の成立と自然神学」